

ミステリ読書案内

2023. 7. 8 発行元

第495号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

ジェームズ・クラムリーの代表作

「正統派ハードボイルド」の流れに乗った作品を書いたジェームズ・クラムリーの代表作について考える。とは言っても、作品数が少ないので全作品の紹介と言っても構わない。今は手に入りやすいのかな？

「正統派ハードボイルド」の作家

小泉喜美子も「訳者あとがき」で「正統派ハードボイルド」について触れている。ハメット、チャンドラー、ロス・マクドナルドの御三家の後を継ぐ作家としてジェームズ・クラムリーを上げている。ケイン、マッギヴァーン、ウエストレイク、パーカーなどの名も上げながらも、御三家には及ばないとして、「ようやくここにクラムリーを紹介できる」と述べている。チャンドラー好きの私にも賛成できる考えだ。

クラムリーはとにかく作品数が少ない。代表作を選ぶのは簡単だ。

どれも皆酔っ払いが登場するのがクラムリーらしいところで、枠にとられないで自由に生きようという姿が伝わってくる。ユーモアを含んだ軽妙な受け答えの会話がハードボイルドらしさ、チャンドラー風の味を醸し出している。

私立探偵が依頼を受けて行方不明者を探すという定番の形を取りながら、社会的弱者だったり、落ちこぼれの人達だったりを温かい筆致で描き出す。そして「優しさ」や「人間的な強靱さ」について語ったりする。自分自身は決して成功者ではなく、でも自分なりの生き方を追求していく物語である。

NO.3「ダンシング・ベア」

1983年。長編第四作。早川書房日本語版は1985年に出ている。大久保寛の訳。探偵役は元私立探偵のミロ。

本書になると、ミロは酒を減らして警備会社の夜勤担当の仕事をするようになっている。ミロは父親の昔の愛人だった老女から、ある男女について調べてくれないかという相談を受ける。その二人は夫婦ではなく、人目を避けて会っているようなのだが、何の目的で会っているのかを知りたいという…。ミロが尾行調査に入ると、男の方が自動車ごと爆弾で吹っ飛んでしまい、思いもかけない方向に物事が進んでしまう。ここに取り上げた二作とは異なり、全米を駆け巡っての活劇になっていく。「世界は…しらふでいるには狂い過ぎている」

NO.1「酔いどれの誇り」

1975年の作。長編第二作。早川書房日本語版は1984年に出ている。小鷹信光の訳。題名のとおり酔いどれの私立探偵ミロが登場してくる。本名ミルトン・チェスター・ミロドラゴヴィッチ三世。先祖がロシア移民らしい。中西部のモンタナ州の小都市メリウェザーで探偵を開業している。「職業は酔っ払い。神様も公認さ。」とうそぶく。州に「離婚法」が成立し、離婚のための材料集めを担当していたミロは開店休業状態に。それで昼間から酔っ払うという有様。

事務所を訪ねてきたのは大学教師のヘレン・ダフィ。なかなか話しを切り出せない彼女はウィスキー・サーバーを頼んだ後、弟のレイモンドについて話始める。西部の歴史を調べて修士号を取るためにメリウェザーに来たはずだという。三週間連絡が途絶え、宿泊していたはずのホテルは火事に…。行方を探してほしいという依頼である。ミロが知り合いの飲み仲間などから情報を集めていくと、弟はヘレンが言うほど健全な生活はしておらず、ホモセクシュアルの男たちと一緒に暮らし、麻薬にふける青年だったようだ。やがて、弟はある酒場で麻薬をうち過ぎた死体となって発見され…。ミロは事件の全体像を解明しようと捜査を続けていく。

No.2「さらば甘き口づけ」

1978年の作。長編第三作。早川書房日本語版は1980年に出ている。クラムリー作品の日本初登場が本書。小泉喜美子の訳。本の帯に「チャンドラーの心を継ぐ！」とある。これだけで本書を買う気になった。ハードボイルド、チャンドラーと来れば当然。同じく酔いどれの探偵なのだが、こちらはスルーという名前。モンタナ州のメリウェザーで事務所を開いている。

スルーは依頼を受けて西海岸の酒場巡り。作家のトラハーンを探してほしいと元妻から頼まれたからである。三週間探し続け、ついにたどり着いた酒場には酔っ払いのトラハーンと酔っ払いのブルドック・ファイアボール・ロバーツがいた。これで仕事が終わるかと思ったとたん喧嘩が始まり、銃が発射されてトラハーンは怪我をして病院に入院することに…。トラハーンに付き添うため十日間ほど時間に余裕ができたスルーは、酒場のマダム・ロージーから10年前に姿を消した娘を探してほしいと言われる。ボーイフレンドと一緒に出掛けたサンフランシスコの街でふらりと車から降りていなくなったという。アル中作家とアル中ブルドックを抱えてのスルーの調査は…。キャラクターが印象に残るハードボイルドの名品と言えるだろう。